



▲ 002SYを煙道の上方から撮影。焚口(たきぐち)に並行して平らな石が敷かれている。(写真上方)



▲ 底面に敷かれていた石を外す。(石の下にも炭化物や被熱痕が確認できた)

最後に、コヤバ遺跡の「コヤバ」という字(あざ)名について。明治17年作成の地籍図を見てみると、字名はカタカナではなく「小屋場」となっていました。屋根のついた炭焼窯と作業場は「小屋」を連想させますが、どうでしょうか？

※遺構の記号について

私たち調査員は遺構を記号で表記することが多いです。本文中でも記号を使っています。今回の報告で使用した記号について説明しておきます。

001SY

「001」はこの遺跡の中で1番目に記録された遺構であることを表しています。「SY」は窯を意味します。002SYであれば、2番目に記録された遺構である窯ということです。

004SK

「004」はこの遺跡の中で4番目に記録された遺構であることを表しています。「SK」は土坑を表します。ですから、この遺跡の中で4番目に記録された遺構である土坑という意味になります。

1月4日(金曜日)更新 鶴ヶ池遺跡の調査について

新年、あけましておめでとうございます。

調査研究課の奥野です。

鶴ヶ池遺跡の調査が終了しましたので、調査結果をお知らせします。

鶴ヶ池遺跡は豊田市下山田代町にあり、東西に伸びる尾根上に立地している遺跡です。今回の調査では、尾根の北側にあたる3つの区域(A区:2050㎡、B区:950㎡、C区:300㎡)が調査対象になりました。発掘調査は昨年6月から12月にかけて行われ、すべての調査区合わせて1000点を超える遺物が見つかりました。遺物のほとんどが縄文時代早期と中期のもので、縄文土器や石器、剥片などがたくさん出土しました。遺構については縄文時代の陥穴(おとしあな)や土坑、近代の炭窯の跡などが見つかりました。



写真1 鶴ヶ池遺跡全景。左からA区、中央B区、右手前C区、右奥は栗狭間遺跡です。



写真2 C区の調査風景です。木の根っこ近くにも土器が入り込んでいる場合があるので、スコップで丁寧に掘って行きます。



写真3 C区で見つかった炭窯。



写真4 C区で見つかった土坑。中から縄文時代早期の土器が沢山出土しました。



写真5 C区出土の石匙(いしさじ)。動物の皮を剥いだりするのに使ったと考えられている道具です。



写真6 C区出土、黒曜石の石核(せきかく)。石器を作る材料にする原石です。



写真7 C区の調査風景。小さな遺物も埋まっているので、慎重に掘って行きます。



写真8 C区調査区内にモグラが出現！穴だらけにされました。



写真9 C区出土、縄文土器の深鉢の口縁の破片です。



写真10 同じくC区出土縄文土器。不思議な紋様がありますね。



写真11 B区での陥穴(おとしあな)出土状況。谷間におとしあなを作って、動物を待ち構えていたのでしょうか？



写真12 B区の陥穴(おとしあな)を上から見た写真。真ん中の穴は、杭の跡だと思われます。



写真13 B区で見つかった磨製石斧(ませいせきふ)の破片。



写真14 A区の調査風景。A区では残念ながら縄文土器は見つかりませんでした。

11月29日(木曜日)更新 皿田遺跡の調査について(続報)

調査研究課の小澤です。

皿田遺跡の調査報告の続報です。皿田遺跡はA区とB区に分割して調査を行っています。A区の調査が終了し、B区の調査が始まりましたので、今回はその途中経過を紹介します。

B区は、A区の東側斜面を登ったところに位置しています（標高約520m）。調査面積は2.100㎡でA区のほぼ2倍の広さです（写真1）。



写真1 皿田遺跡全景上空から（中央にB区、右上方（西側）にA区）

調査はまず、植樹林伐採後の枝葉の処理や下草刈りをおこないながら、表面から確認できる遺構を探すことからはじまりました。A区同様に炭窯とみられる遺構が数箇所ありました。その中で調査区南側と北東角の検出作業をおこないました。その結果、南側には煙道・焚き口のない伏焼きタイプの炭窯（013SY、015SY）が見つかりました。北東角には煙道、焚き口があり、窯壁もしっかりした炭窯（014SY）がありました。この炭窯は、A区のものとは異なり窯壁には小石が貼られていませんでした。小石ではなく粘土ブロックを3～4段に積み上げて窯壁を構築したように見られます。また、溝（幅約30～40cm、長さ約270cm、最深部約50cm）が焚き口（炭のかきだし口）中央から灰原にかけて傾斜をつけて掘り込まれていました。溝内部は窯壁の粘土と似た黄褐色粘土で埋められ、焼けた粘土片やススが混ざっていました（写真2）。土器などの遺物はありませんでした。溝と炭窯本体、灰原の状況（溝が焚き口をふさいでいた焼けた粘土塊の下にあったこと、灰原面から掘り込まれていたこと等）から、溝は炭窯を構築したときにはなく炭窯使用の最終時期に近い頃に掘られたものと考えています。何のためにこのような溝を掘ったのかは不明です。



写真2 炭窯（014SY 溝検出状況（左）溝掘削後（右））

調査区全体で遺物は、今のところ、縄文土器片、剥片石器（黒曜石、チャート 写真3）、砥石等が見つっています。



写真3 剥片石器（黒曜石（左）、チャート（右））

11月21日（水曜日）更新 柿根田遺跡の調査について（続報）

調査課の石井です。

柿根田遺跡のA区およびB区が終了しましたので、調査結果をお知らせします。

柿根田遺跡は4調査区に分割して調査を進めており、10月に南北約130m、東西約90mの南東斜面に広がるA・B区の調査が終わりました。

調査では北寄りのA区の斜面の下の方を中心に、縄文時代から近・現代までの遺構や遺物を検出しています。縄文時代は中期後半（約4500年前）を中心とした土器が多数出土しました。他に石匙（いしさじ）とよばれる小さなつまみのついた石器5点のほか、磨石（すりいし）や剥片（はくへん）が出土しています。遺構は土器の入った小穴をはじめ、いくつかの小穴を検出しました。

平安時代から中世にかけての遺構は、墓とみられる平面が長方形の土壇（どこう）5基や土坑（どこう）を多数検出しました。土坑（どこう）のなかには規則的に並ぶものがいくつかあり、建物があった可能性が考えられます。この時期の遺物は灰釉陶器（かいゆうとうぎ）や山茶碗の破片が出土しています。このほか、B区では時期は不明ですが動物の骨が出土した土坑（どこう）を、A・B区の斜面中程では炭焼窯を計5基検出しています。

これから遺物を含む調査成果を検討します。また新しいことがわかりましたら、こちらで報告したいと思います。



A・B区全景（西から）

10月26日（金曜日）更新 皿田遺跡の調査について（続報）

調査研究課の小澤です。

皿田遺跡の調査報告の続報です。今回はA区の調査が終了しましたので調査結果を紹介します。

遺構としては、前回紹介した炭窯3基を除くと炭窯周辺の土坑と南側斜面の頂部の土坑状の浅い窪地が見つかりました。時代は遺物がともなっていないのではつきりとわかりません。ただ、これらの遺構は表面から観察されたり、表土を取り除いたらすぐに見つかっていますので近代以降の新しい時代のものであると考えています。東側の炭窯では、それぞれのかき出し部に作業で使用したと考えられる平坦地がありました。また、その下方に炭をかき出してできた灰原（黒色部）が斜面に広がっていました（写真2）。南側斜面頂部には煙道のない伏焼きタイプの炭窯（011SY）がありました。



写真1 調査区全景西側上空から



写真2 炭窯検出状況（調査区上方右角（南東角）に001SY、中央やや上方に002SY）

遺構が少ないこともあり遺物もあまり出土しませんでした。それでも、古代～中世の遺物である灰釉陶器（写真3）や山茶碗、鍋、甕（写真4）などが数点見つっています。生活のはっきりとした跡はありませんでしたが、遺物が見つっていますので当時の人々が標高約500mの中山間部まで来ていたことは間違いありません。鍋や甕は生活に結びつくものです。したがって、周辺には人々の生活した跡（遺構）があるのかもしれませんが。



写真3 灰釉陶器



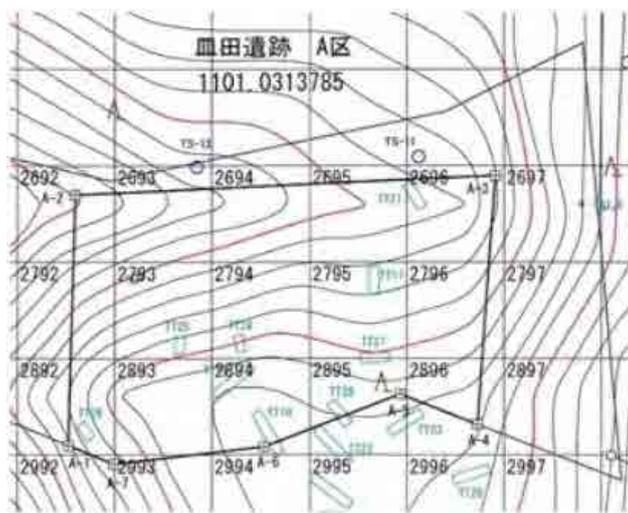
写真4 甕

10月2日（火曜日）更新 皿田遺跡の調査について

調査研究課の小澤です。

皿田遺跡の調査報告です。皿田遺跡はA区（1100㎡）・B区（2100㎡）、二つの調査区に分かれています。発掘調査はA区からはじまりましたので、今回はA区の調査状況を紹介します。

A区は、西から東へとびる尾根の南側の斜面に位置し、その中でも急な斜面の頂部から谷の中央部にかけた範囲を発掘調査の対象としています。



黒線で囲われた範囲が調査区

作業としてははじめに、調査区内の樹木伐採後の下草取りや腐葉土を取り除く作業を行いました。その結果、炭窯（炭焼き窯）が3基見つかりました。炭窯の範囲を確定するための表土掘削をおこなった後、土砂の搬出を考慮して南側の尾根状斜面の頂上部から下方に向けて発掘をはじめました。表土は斜面では20～30cmほどの堆積でその下からは地山（地盤）の花崗岩がみられます。斜面での表土掘削と地山（地盤）の検出の進み具合に合わせて炭窯を精査しました。